

東京・春・音楽祭2020

Trio Accord ——

白井 圭 (ヴァイオリン)、門脇大樹 (チェロ)、津田裕也 (ピアノ)

ベートーヴェン ピアノ三重奏曲 全曲演奏会 III



曲目解説

ベートーヴェンのピアノ三重奏曲

ピアノ三重奏曲 第10番 変ホ長調 op. 44 《創作主題による14の変奏曲》

1792年頃、ベートーヴェンがまだ22歳前後の作品。主題は、当時人気を博していたディッターズドルフのジングシュピール《赤ずきん》の aria の一部から採られている。

ユニゾンのアルペジオがスタッカートで愛らしく始まったあと、14の変奏が続く。第7と第13変奏はゆったりとしたテンポになり、最終変奏は躍動感に満ちたアレグロで、アンダンテのコーダを経て、最後はピアノが引っ張って、プレストで力強く終わる。

ピアノ三重奏曲 第3番 ハ短調 op. 1-3

ベートーヴェンの記念すべき作品1には3つのピアノ三重奏曲が含まれており、1794～95年に作曲されたと推定されている。3曲のなかではもっとも演奏機会が多く、充実度も高い。何よりベートーヴェンならではのパッションに満ち、後年の大作を予感させる。

4楽章構成で、第1楽章アレグロ・コン・ブリオは、第1主題がユニゾンで情感を掻き立てるように始まり、対照的に明るい第2主題が現れてほっとしたのもつかの間、再び不安の影が差し、気持ちが不安定に揺れ動く。第2楽章アンダンテ・カンタービレ・コン・ヴァリアツィオーニは、主題と5つの変奏およびコーダからなり、激情的な前楽章から一転して、穏やかな静けさに満たされる。第3楽章メヌエットは、メヌエットらしからぬ重厚さで、トリオでは下降音階を軽やかに転がるピアノに呼応して、チェロが朗々と歌う。第4楽章フィナーレはソナタ形式。フォルテッシモの序奏で始まり、冒頭楽章を上回る情熱を帯びている。最後はピアノニッシモでコーダに入り、そっとため息をつくように曲を閉じる。

ピアノ三重奏曲 第7番 変ロ長調 op. 97 《大公》

ベートーヴェンのピアノ三重奏曲のみならず、ピアノ三重奏曲というジャンルにおいて、一つの結実点に達した大曲である。作品が完成したのは1811年、あの輝かしいピアノ協奏曲第5番《皇帝》が初演された年であった。「大公」という別名は、ルドルフ大公に献呈されたこと、そして大公自身がこの作品に感激したことに由来

する。1814年の初演ではベートーヴェンがピアノを弾いた。

4楽章構成で、内容の充実度、規模ともに比類がない。ソナタ形式の第1楽章アレグロ・モデラートは、第1主題を雄大に奏でるピアノ独奏に始まり、明るさのなかにも伸び伸びとした大らかさが感じられる。第2主題もピアノがスタッカートで歌い出し、チェロに受け渡される。各楽器が有機的に絡み合い、最後はコーダで第1主題が奏されて、華やかに楽章を終える。第2楽章スケルツォは三部形式。軽やかにリズムを刻むスケルツォ主題に続いて、中間部では突然チェロがうねるような半音階の動機を奏し、華々しいピアノの旋律へとつながる。第3楽章アンダンテ・カンタービレ・マ・ペロ・コン・モートは、主題と4つの変奏からなる長大な楽章。主題はピアノ独奏で始まり、弦へと引き継がれ、ベートーヴェンの旋律美の極みを奏でる。特に最終変奏はたとえようもなく美しい。コーダでもとのテンポに戻ったのち、そのまま中断なく最終楽章へと続く。第4楽章アレグロ・モデラートはロンド形式。前楽章の余韻を断ち切るように勢いよく始まり、軽やかに踊るようなロンド主題が奏される。終始ピアノが主導権を持って華麗に弾きまくり、最後はフォルテッシモで全曲を閉じる。